



Title	アラブ伝統文法における省略・削除に関わる用語について：スィーバワイヒとイブン・アッサッラージュによる使い分け
Author(s)	岡崎, 英樹
Citation	アラブ・イスラム研究. 2024, 22, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106211
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブ伝統文法における省略・削除に関わる用語について ——スィーバワイヒとイブン・アッサラージュによる使い分け——

岡崎 英樹*

Ellipsis in Arabic Grammatical Thought and Related Terms —— The Use of the Terms by Sībawayhi and Ibn as-Sarrāğ ——

The aim of this paper is to organize the concept of “ellipsis” and “deletion” as described by the various grammatical terms in traditional Arabic grammar. In particular, we will discuss how grammarians in the early period of grammar, from the 8th to the 10th century, viewed ellipsis and deletion and how the terminology was finalized. In order to achieve this objective, we will utilize the two terms *ḥaḍf* and *ʾiḍmār* as presented in Sībawayhi’s *al-Kitāb*, which has been the subject of considerable study in this field. I will then compare this usage with that found in Ibn as-Sarrāğ’s *al-ʾUṣūl fī an-Naḥw*. Furthermore, we will analyze what kind of elements are deleted when the terms *ḥaḍf* and *ʾiḍmār* are used differently.

1. はじめに

本稿の目的は、アラブ伝統文法の多様な文法用語によって記述される「省略・削除」の概念について整理を行うことである。特に、文法学初期の8世紀から10世紀にかけて、文法家たちがどのように省略や削除をとらえ、用語が確定していったのかについて考察する。そのために、この分野で比較的研究が進んでいるスィーバワイヒの *al-Kitāb* における *ḥaḍf* と *ʾiḍmār* の二つの用語の使い分けに基づき、イブン・アッサラージュの *al-ʾUṣūl fī an-Naḥw* にみられる使い分けとの比較を試みる。さらに、何が省略・削除される場合に *ḥaḍf* と *ʾiḍmār* の用語が使い分けられるのかについて分析する。

2. 「省略・削除」と文法用語

Carter (2007:16–17) は、“elision”を意味するアラビア語の用語のうち、最も重要なものが *ḥaḍf* と *ʾiḍmār* の2つであることを指摘し、*ḥaḍf* の原義を“cutting off, curtailing”、*ʾiḍmār* の原義は“keeping in mind”としている。さらに、関連する語彙を次の(1)から(4)に分けて提示している。

* 四天王寺大学 准教授

- (1) 文法用語とみなすのは困難であり、ḥaḍf の言い換えや説明として用いられるもの : suqūṭ (falling away [of a sound]), ḍahāb (departure [of a sound], which simply denote the effect of elision), kaff (refraining [from saying something]), ḥazala, iḥtazala (to cut off, withhold)
- (2) 動詞や名詞の語末変化に関するもの : taskīn, 'iskān (lit. 'silencing', i.e. removing a vowel or vowelling with zero), ḡazm (lopping off [an inflectional vowel]), waqf (stopping)
- (3) 音韻的消失の原因を示すもの : taḥfīf (lightening [a syllable]), istiḥfāf (treating [a syllable] as light)
- (4) 文体的・修辭的な目的を示すもの : 'iḡāz (being succinct), ittisā' (exercising latitude), iqtisār (keeping short), iḥtisār (being brief)

アラブ伝統文法において、「省略・削除」という概念について系統的に扱うものは少なく、断片的な記述を頼りに全体像を構築するほかない。そのような中で、14世紀のイブン・ヒシャームによる *Muḡnī al-Labīb* には、「省略・削除」について比較的细节に記述している部分がある¹⁾。これによれば、構造的に必須である要素 ('imād) の省略には dalīl ḥālī²⁾が必要である。これに対して、構造的に必須でない要素 (faḍla)³⁾の削除には dalīl ḥālīを要さない⁴⁾。また、イブン・ジンニーは、節や句 (ḡumla)、語 (mufrad)、音 (ḥarf, ḥaraka) が省かれる根本原理について、次のように簡潔に述べている。「laysa šay'-un min ḍālika 'illā 'an dalīl-in 'alay-hi wa-'illā kāna fī-hi ḍarb-un min taklīf-i 'ilm-i al-ḡayb-i fī ma'rifat-i-hi, *Ḥaṣā'is* II, 360. 文脈の中でそれについて何らかの言及がない限り、また、消失について何らかの認識がない限り、省略・削除は行われることはない。」

省略や削除は無条件に用いられるわけではない。スィーバワイヒは動詞の省略について3つの範疇からなる原則を示している⁵⁾。①動詞を隠すことが正しくない場合 : たとえば、殴ることに何も言及せずに *zayd-an* という場合、動詞の使用は必須である。さもなくば、聞き手はザイドを殴ったことを意味していることを理解できない。②動詞が通常隠される場合 : たとえば、殴ったことに言及したうえで、*zayd-an*

1) *Muḡnī* II, 603ff.

2) dalīl は “an indicator of what is elided” (Dayyeh 2012: 89)、dalīl ḥālī は “context of situation” (Carter 1981: 379) の英訳が与えられる。関連する用語 dalīl lafẓī, dalīl maqālī については、Carter (1981: 9, 379) を参照。

3) 文法用語 faḍla についての詳細な議論は、Okazaki 2022: 189ff.を参照。ここでの'imādに相当する一般的な用語は'umdaであり、faḍlaと対比される。文法用語 faḍla は、特に maf'ūl bi-hi, zarf, maf'ūl la-hu, maf'ūl ma'a-hu, maṣdar, ḥāl, tamyīz, istiḥnā' の8種の名詞対格を包括して呼ぶ際に用いられる(*Ḥaṣā'is* I, 197. Cf. *ŠK* I, 113) が、ここではより一般的な意味で用いられている。

4) Carter 1991: 127; Gully 1995: 210.

5) fa-'rif fī-mā ḡakartu la-ka 'anna al-fī'l-a yaḡrī fī al-'asmā'-i 'alā ṭalāṭati maḡārin: fī'l-un muḡhar-un lā yaḡsunu 'iḍmār-u-hu, fī'l-un muḍmar-un musta'mal-un 'iḡhār-u-hu, fī'l-un muḍmar-un matrūk-un 'iḡhār-u-hu (*Kiṭāb* I, 125, *Uṣūl* II, 247). この部分の解釈については、Owens 1988: 192–193; Carter & Versteegh 2007: 301–302; Marogy 2010: 85; Dayyeh 2012: 89–90.を参照。

という場合、動詞は使用されてもよいし、使用されなくてもよい。③動詞が常に隠される場合：たとえば、*marḥab-an* のような表現がこのカテゴリーに属し、動詞を表現することは正しくなくなる。

3. ḥaḍf と 'iḍmār

ḥaḍf と 'iḍmār は、ともに「省略・削除」などの意味を持ち、アラブ文法学の初期の時代から使われていた用語である⁶⁾。スィーバワイヒの *al-Kitāb* においては、ḥaḍf が214回（動詞 ḥaḍafa は553回）、'iḍmār が90回（動詞 'aḍmara は142回）と多用されている⁷⁾。

'iḍmār は便宜上、“ellipsis”、“suppression”などに、ḥaḍf は“deletion”、“elision”などと英訳されることが多い⁸⁾。Carter & Versteegh (2007: 300) は、ḥaḍf が表層レベルにおける純粹に音韻的な削除・省略を指し、発話を形式的に不完全なものにするのに対して、'iḍmār は、深層構造と呼ぶことが可能なレベルにおいて、音韻的な完全性とは無関係に、要素を表に出さないという心理的活動を指し、必ずしも形式的に不完全な発話を生み出すとは限らないとしている。

なお、スィーバワイヒは、'iḍmār を「人称代名詞」の意味で使用する場合があります⁹⁾。イブン・アッサッラージュは、人称代名詞を *maknī*¹⁰⁾と呼ぶが、スィーバワイヒに倣って 'iḍmār と呼ぶ箇所もみられる¹¹⁾。

また、上述の 'iḍmār（動詞 'aḍmara の動名詞）に加えて、*muḍmar*（動詞 'aḍmara の受動分詞）も「削除・省略」の意味を持つ文法用語として用いられる。*al-Kitāb* では *muḍmar* が“suppression”と“pronominalization”の両方の意味で76回使用されている¹²⁾。*muḍmar* は、スィーバワイヒやアルムバッラドらのいわゆるバスラ学派のみならず、アルファッラー (d. 822)らのクーファ学派の文法家の間でも広く用いられていた¹³⁾。

6) 'iḍmār は Muqātil (d. 767) の *Tafsīr* での使用も確認できる。統語的には必須ではないが、文脈から再構築できる要素を隠すことを指した。後のクルアーン注釈書では、隠された要素が表層構造の説明のために必要な場合に用いられるようになった。Versteegh 1993: 146–151.

7) Troupeau 1976: DMR & HḌF, Baalbaki 2008: 70.

8) 'iḍmār と ḥaḍf に適切な英訳を与えることの問題点については Villano 2016: 61–62 を参照。なお、英語の deletion と ellipsis の定義については、Hinds 1982: 18 が明確に区別しており、deletion が変形概念 (transformational notion) であるのに対して、ellipsis は表層構造において何らかの要素が省かれるものであると定義している。

9) *Kitāb* I, 187. なお、アルムバッラドは同じ文脈で *muḍmar* を使用する。*Muqtaḍab* IV, 279. 人称代名詞、指示代名詞、関係代名詞とこれらの用語の使い分けについては、Fleisch (1960: 1027) を参照。

10) イブン・アッサッラージュは「限定」の定義の中で次の5種を分けている：*maknī*, *mubham*, 'alam, *mā fī-hi* 'alif wa-lām, *mā 'uḍfa* 'ilay-hinna (*'Uṣūl* I, 149). スィーバワイヒ、アルムバッラド、イブン・アッサッラージュらによる用語の違いについては、Sakaedani 2019: 235–240 が詳細に論じている。

11) *'Uṣūl* II, 32.

12) Troupeau 1976: DMR.

13) Kinberg 1996: 430–433.

muḍmar と maḥḍūf (ḥaḍafa の受動分詞) とが明確に区別されている例として、イブン・ヒシャームによるものがある。ḍaraba-nī wa-ḍarabtu zayd-an ([ザイドが] 私を殴り、私はザイドを殴った) について、「動詞 ḍaraba の動作主は削除された (maḥḍūf) のであり、代名詞化された (muḍmar) とは解釈されない」¹⁴⁾とされている。つまり、ḍaraba という動詞の語形変化に含意された3人称男性単数の代名詞「彼」と解釈されるのではなく、動詞 ḍaraba に後続する動作主 zayd-un が削除されたと見なされる。

以上で見たように、ḥaḍf と 'iḍmār の2つの用語が持つ意味範囲は重複する部分も多く、区別されずに用いられることも少なくない。このため、本稿では文脈に応じてどちらにも「削除」「省略」の訳語を与えることとし、敢えて固定的な訳し分けを行うことは避けている。

3.1 *al-Kitāb* における ḥaḍf と 'iḍmār

文法用語 ḥaḍf と 'iḍmār は、明確な使い分けがなされていない例が見られるため、あたかも同義語であるかのように捉えられることも少なくない。しかし、Dayyeh (2012: 81) は、スィーバワイヒの *al-Kitāb* に関しては、これらの用語は同義語ではなく、一貫した使い分けが存在することを指摘している。彼女によると、ḥaḍf は省かれた要素が隠されたまま頻繁に用いられる構造において現れるのに対し、'iḍmār は省かれた要素が表層に現れる場合もあれば現れない場合もあるような構造を示すときに用いられるとしている¹⁵⁾。たとえば、'iyyā-ka wa-l-'asad-a (ライオンに気をつけろ!) のような注意喚起を表す文においては、'iyyā-ka の後に naḥḥi (離せ)、bā'id (遠ざけよ)、ittaḥi (気をつけろ) などの動詞・命令形の省略・削除が想定されるが、表層に現れることはない。この場合、スィーバワイヒは ḥaḍf を用いて動詞の省略・削除を説明している¹⁶⁾。これに対し、al-'asad-a, al-'asad-a (ライオンだ! ライオンだ!) の例においては、lā taqrab al-'asad-a (ライオンに近づくな) のごとく、否定命令 lā taqrab などの省略・削除が想定されるが、表層に現れることもあり得る。この場合、スィーバワイヒは 'iḍmār を用いている¹⁷⁾。

Ayoub (1990) は、'iḍmār に内包された二重の意味を話者の役割に焦点を当てることで説明している。彼女によると、どちらの場合においても、相手が何を指すか理解するだろうと話者が分かっているから発話の一部を省略・削除するのである。これは、しばしば「意図して fī an-niyya」という表現とともに 'iḍmār が用いられる所

14) wa-qāla al-kisā'i wa-hiṣām wa-s-suhaylī fī naḥw-i, ḍaraba-nī wa-ḍarabtu zayd-an: 'inna al-fā'il-a maḥḍūf-un lā muḍmar-un (*Muḡnī* II, 608).なお、他の文法書においては、該当する例文の解説においてこれほどの用語の使い分けは行われていない。*Kitāb* I, 28–30; *Muqtaḍab* III, 113, 123, 127, 128; IV, 78; *Uṣūl* II, 244, 317; *Ḥaṣā'ish* II, 111; *Mufaṣṣal*, 19; *ŠM* I, 77, *Ham'* III, 96. 詳細については、Carter 1991: 122–123; Gully 1995; 209; Carter & Versteegh 2007: 300–301.

15) Dayyeh 2012:83–84.

16) *Kitāb* I, 116–117.

17) *Kitāb* I, 107.

以である¹⁸⁾。ある動詞を用いるか隠すかの選択は、話者の側の語用論的なモチベーションに関連しているのである。

次の例は、ḥaḍafa と 'aḍmara の使い分けを端的に表している。否定の lam、lammā、命令の li-¹⁹⁾などの辞詞には、動詞未完了形・要求法が後続する。しかし、詩における li-の省略の可能性について、スィーバワイヒは、ムタンミム・ブヌ・ヌワイラの詩²⁰⁾を引用して次のように言う。「この種の li-は詩において許される可能性がある。それは省略された状態で文法的機能を担う。'an が省略されて機能を担うのと同じように。wa-'lam 'anna ḥāḍihi al-lām-a qad yaḡūzu ḥaḍf-u-hā fī aš-ši'r-i wa-ta'malu muḍmarat-an wa-ka-'anna-hum šabbahū-hā bi-'an 'iḍā 'amilat muḍmarat-an, *Kitāb* I, 363」

つまり、ḥaḍf は「省略・削除」そのものを指しているのに対し、muḍmar は削除され表面からは隠れているものの、文法的な機能を依然として有していることを示すものである。

3.2 *al-Kitāb* 及び *al-Muqtaḍab* から *al-'Uṣūl* へ

al-Kitāb、*al-Muqtaḍab*、*al-'Uṣūl* などの文法書にみられる “deletion” 及びそれに関連する用語について、Dayyeh (2012: 89–90) は、ḥaḍf の用語がアルムバッラドの *al-Muqtaḍab* 及びそれ以降の文法書においては一貫した使い方がなされていないとの見解を示している。彼女によると、kaṭra (frequent usage) と ḥaḍf との関連においては、イブン・アッサラージュが削除の条件としての kaṭra の概念を軽視する一方で、発話状況や話者が持つ情報に重点を置く点がスィーバワイヒとは異なるという。

以下では、イブン・アッサラージュの *al-'Uṣūl* における ḥaḍf と 'iḍmār の使い分けについてまとめる。前出のムタンミム・ブヌ・ヌワイラの詩に関し、li- の省略を記述する際にスィーバワイヒは ḥaḍf を用いていた。イブン・アッサラージュも全く同じ表現 (wa-yaḡūzu ḥaḍf-u ḥāḍihi al-lām-i fī aš-ši'r-i wa-ta'malu muḍmarat-an, *'Uṣūl* II, 157) を用いている。しかし、別の箇所では同じ文法事項について 'iḍmār を用いてこのように解説している。「もしやむを得ない事情があれば、この種の li- の削除が詩人に許されると文法家たちは言う。wa-n-naḥwiyyūna yuḡīzūna 'iḍmār-a ḥāḍihi al-lām-i li-š-šā'ir-i 'iḍā uḍturra, *'Uṣūl* II, 174」²¹⁾

このように、イブン・アッサラージュの *al-'Uṣūl* には、同一の文法現象について ḥaḍf と 'iḍmār の両方を用いる例がみられる。これ以外にも、条件文 'in ta'ti-nī

18) Ayoub 1990: 3–4; e.g. *Kitāb* I, 106.

19) このような li- は lām al-'amr (命令の li-)と呼ばれ、要求法 (3人称男性単数) が後続し命令の意味を表す。

20) 'alā miṭl-i 'aṣḥāb-i al-ba'ūdāt-i fa-ḥmišī la-ki al-wayl-u ḥurr-a al-waḡh-i 'aw yabki man bakā (アルバウダの住民に倣って、頬を掻きむしるがよい。汝に災いあれ。もしくは、泣く者は泣け) の詩について、動詞未完了形 yabki が要求法であることの解釈として、li-yabkiのごとく命令の li-を想定し、それが省略されているとの主張である。

21) アルムバッラドも全く同じ表現を用いる。*Muqtaḍab* II, 132.

fa-’ātī-ka (もしあなたが私のところに来たら、私はあなたのところに行く) における辞詞 fa- の省略の可否²²⁾に関して、al-’Uṣūl では3カ所で扱われているが、ḥaḍf al-fā’ と ’iḍmār al-fā’ の表現が混在している²³⁾。

これと同じ例文についての解説において、スィーバワイヒは ḥaḍf al-fā’ (Kitāb I, 389)、アルムバッラドも fā’ の想定 (’irādat al-fā’) として ḥaḍf al-fā’ (Muqtaḍab II, 71) を用いている。つまり、この例のみからは、スィーバワイヒ、アルムバッラドが ḥaḍf を一貫して用いているのに対し、イブン・アッサッラージュは ḥaḍf と ’iḍmār の両者を厳密に区別せずに用いていることになる。しかし、次にみるように、イブン・アッサッラージュは、ほとんどの場合においては、スィーバワイヒやアルムバッラドの用語の使い分けを踏襲していることが確認できる。そして、ほとんどの場合において ḥaḍf と ’iḍmār を明確に使い分けている。

3.2.1 ḥaḍf

イブン・アッサッラージュが ḥaḍafa 及び動名詞 ḥaḍf、受動分詞 maḥḍūf を用いる文法現象に関し、スィーバワイヒも同じように ḥaḍf を用いている例は、少なくとも18カ所で見られる。

たとえば、音韻面での省略・削除について、誓い (qasam) の表現 hā allāh-i の hā から ’alif が削除²⁴⁾され hallāh-i との読み方が存在することを、イブン・アッサッラージュは「ハーに続くアリフを削除する yaḥḍifu al-’alif-a allatī ba’da al-hā’-i, ’Uṣūl I, 431」と述べている²⁵⁾。「アリフの削除」については、イブン・アッサッラージュは ramā ar-raḡul-u の定冠詞直前の長母音 /ā/ が短母音化することにも用いている (’Uṣūl II, 371)²⁶⁾。スィーバワイヒにも同じ例文の短母音化を「アリフの削除 ḥaḍf al-’alif」と呼ぶ箇所がある²⁷⁾。また、munḍu の語中の子音 /n/ と語末の母音 /u/ が脱落し、muḍ となる場合があることを、イブン・アッサッラージュは「muḍ については、munḍu から削除が行われたものである ’ammā muḍ fa-maḥḍūfat-un min munḍu, ’Uṣūl II, 137」と説明している。スィーバワイヒは、この件についてハリール・ブヌ・アフマドの言葉を引用する形で ḥaḍf の用語を使用している²⁸⁾。また、アルムバッラドも「アインの位置 [つまり第2語根] が削除される。muḍ において行ったのと同様に。

22) wa-lā yaḡūzu: ’in ta’ti-nī ’ātī-ka ’illā fī ḡarūrat-i sā’ir-in ’alā ’iḍmār-i al-fā’-i, wa-’ammā mā kāna siwā ’in min-hā fa-lā yaḡsunu ’an yuḥḍafa al-ḡawāb-u, wa-sībawayhi yaḡūzu: ’in ’atīta-nī ’ātī-ka (’Uṣūl II, 161).

23) ḥaḍf al-fā’ は ’Uṣūl II, 193, ’iḍmār al-fā’ は ’Uṣūl II, 161; III, 462 の2カ所で用いられている。

24) 長母音 /ā/ が短母音化して /a/ となることを、ハーやアリフの文字に焦点をあてて yaḥḍifu al-’alif-a allatī ba’da al-hā’ (ハーの後にあるアリフを削除する) と表現したもの。

25) Kitāb II, 147; Muqtaḍab II, 322.

26) これに後続するパラグラフでは、イブン・アッサッラージュは ḥaḍafa に加えて saqaṭa を用いている。wa-ramat, daḡalta at-tā’-a wa-hiya sākinat-un ’alā ’alif-i ramā fa-saqaṭat, wa-qālū: ramaya, wa-ḡazawa (’Uṣūl II, 371).

27) Kitāb II, 300.

28) Kitāb II, 41–42.

つまり、*munḍu* から削除されたのはアインの位置であるから。*fa-yuḥḍafu mawḍi‘-u al-‘ayn-i ka-mā fu‘ila fī muḍ li-‘anna al-maḥḍūf-a fī munḍu mawḍi‘-u al-‘ayn-i, Muqtaḍab I, 33.*」のように *ḥaḍafa* や *maḥḍūf* を使用する。

前置詞が省略される際にも、*ḥaḍf* の語が用いられている。クルアーン7章155節 *wa-ḥtāra mūsā qawm-a-hu sab‘īna raḡul-an* (モーセは自分の民から70名を選出した) に関し、動詞 *iḥtāra* の目的語 *qawm-a-hu* は、*min qawm-i-hi* から前置詞 *min* が省略されたものであるとイブン・アッサッラージュは説明する²⁹⁾。スィーバワイヒは、同じ例文について³⁰⁾、他動詞がとる二つの目的語のうち、一つが前置詞の省略によるものであることを「彼らは前置詞を省略した *ḥaḍafū ḥarf-a al-ḡarr-i, Kitāb I, 12*」と説明する。アルムバッラドも同じ例文について、前置詞 *min* の削除を *ḥaḍafa* を用いて説明している³¹⁾。

辞詞の省略の例としては、クルアーン23章52節の *wa-‘inna ḥāḍihi ‘ummat-u-kum ‘ummat-an wāḥidat-an wa-‘ana rabb-u-kum fa-ttaqūna* (これはお前たちのウンマであり唯一のものである。そして私はお前たちの主であるので、私を畏れかしこめ) の *‘inna* は、本来は *li-‘anna* であると想定され、*li-*が省略されたとみなされる³²⁾。スィーバワイヒは、クルアーンの同じ章句について、ハリールの言葉であるとして「ラームの削除 *ḥaḍf al-lām (Kitāb I, 413)*」の表現を用いる。ただし、アルムバッラドは同じ例文に関し、*muḍmar* の用語を用いつつ *li-‘anna* を *taqdīr (imaginary utterance)*³³⁾ であるとしている³⁴⁾。

名詞が削除・省略された場合に *ḥaḍf* が用いられる代表的なものに、以下のものがある。*wa-s‘al al-qaryat-a* (村に尋ねよ) は *wa-s‘al ‘ahl-a al-qaryat-i* (村の人々に尋ねよ) の *‘ahl-a* を省略したものである³⁵⁾。本来の名詞対格 *‘ahl-a* の省略の後、*al-qarya* (村) がそれにとって代って動詞 *is‘al* の目的語となって対格をとる。この例のように *muḍāf* が省略された後、他の要素がその統語的地位にとって代わることを *ittisā‘* と呼ぶ³⁶⁾。スィーバワイヒも同一の例文について、*ḥaḍafta al-muḍāf* との表現を用い

29) *‘Uṣūl I, 177, 179.*

30) スィーバワイヒは、この例文を「2つの目的語をとる他動詞の章 *bāb al-fā‘il allaḍi yata‘addā-hu fī‘l-u-hu ‘ilā maf‘ūlayn*」の中で扱っている。前置詞 *min* が省略されたこの例文は *maf‘ūl min-hu* との呼称を与えられているが、スィーバワイヒは、*‘iyyā-ka wa-l-‘asad-a* のような構文を *maf‘ūl min-hu* と呼ぶ。*Kitāb I, 116.* 詳細については、Okazaki 2022: 185 を参照。

31) *Muqtaḍab II, 321, 342; IV, 330.*

32) *‘Uṣūl I, 267, 271.*

33) 省略・削除が行われた要素についての解釈を示す用語 *taqdīr* については、Owens 1988:186ff., Levin 1997を参照。Baalbaki 2008:69–70 は一貫して“suppletive insertion”の英訳を主張している。特にアルムバッラドの *taqdīr* の使い方については Versteegh 2009: 447, Ayoub 2019: 54を参照。

34) *Muqtaḍab II, 347.*

35) *‘Uṣūl II, 95, 255.*

36) *ittisā‘* については Owens 1988:191, Versteegh 1990:281, Levin 1997:145, 155–157, Dayyeh 2015:68–69, Levin 2019: 213ff. を参照のこと。これに類するプロセスとして、受動文の形成がある。能動文の主語 (動作主 *fā‘il*) が削除されると、目的語 (被動作主 *maf‘ūl*) がそれにとって代り、受動文の主語となる。

ている³⁷⁾。アルムバッラドも *ḥaḍafa* を用いる³⁸⁾。同様の構文例として、*qara'tu hūd-an* (私はフードを詠んだ) は、*qara'tu sūrat-a hūd-in* (私はフード章を詠んだ) の *sūrat-a* を省略したものである。本来の名詞対格 *sūrat-a* の省略の後、*hūd* がそれに取って代って動詞 *qara'tu* の目的語となって対格をとる³⁹⁾。この例文について、スィーバワイヒ、アルムバッラドともに *ḥaḍafa* を用いる⁴⁰⁾。

よく使われる表現が、省略によって簡略化された表現となる場合にも、*ḥaḍf* が用いられている。*lā ba's-a 'alay-ka* (あなたに問題はない) が *lā 'alay-ka* になる例については、省略が行われる理由として、「人々の使用頻度の高さのため *li-kaṭrat-i al-isti'māl-i-him 'iyyā-hu*」があげられる点を含み、スィーバワイヒ、アルムバッラド、イブン・アッサッラージュの三者に共通する記述である⁴¹⁾。

上記以外にも、少なくとも *al-'Uṣūl* の13か所で、*al-Kitāb* と同じ文脈で *ḥaḍafa*、*ḥaḍf*、*maḥḍūf* が共通して用いられていることが確認できる⁴²⁾。

3.2.2 'iḍmār

スィーバワイヒ、イブン・アッサッラージュが同じ文脈で *'aḍmara* 及び動名詞 *'iḍmār*、受動分詞 *muḍmar* を用いる箇所が少なくとも23例ある。音韻、形態面での省略・削除を指して *'iḍmār* が用いられる例は少なく、特定の語の省略と、それに伴う機能の継続にかかわる文脈で用いられる場合が多い。

呼びかけ(*nidā'*)の表現 *yā 'abd-a allāh-i* (アブドゥッラーよ) は、*'ad'ū* (私は呼ぶ) もしくは *'urīdu* (私は欲する) などの動詞が想定され、それが削除されたものと説明される。表面的には動詞が現れることはないが、目的語を対格にするという機能は保持され、これにより *'abd* が対格をとることの説明となる⁴³⁾。

同様に、*'iyyā-ka 'iyyā-ka al-mirā'-a* (口論を避けよ) は、*'iyyā-ka 'iyyā-ka ittaqi al-mirā'-a* のように、動詞・命令形 *ittaqi* (気をつけろ) が想定され、*mirā'-a* のように対格をとる⁴⁴⁾。この例でも、*'aḍmara* は省略された動詞の文法的機能は保持されていることを含意している。

上記以外にも、少なくとも *al-'Uṣūl* の21か所において、*al-Kitāb* と同じ文脈で *'aḍmara*、*'iḍmār*、*muḍmar* が共通して用いられていることが確認できる⁴⁵⁾。

37) *Kitāb* II, 24.

38) *Muqtaḍab* III, 355.

39) *'Uṣūl* II, 100.

40) *Kitāb* II, 28, *Muqtaḍab* III, 355.

41) *Kitāb* I, 309; *Muqtaḍab* II, 151, *'Uṣūl* I, 405.

42) *Kitāb*–*'Uṣūl*: I, 71–I, 126; I, 413–I, 267; I, 252–I, 317; I, 256–I, 320; I, 275–I, 341; II, 147–I, 431; I, 68–II, 54; II, 24–II, 95; II, 28–II, 100; I, 123–II, 254; II, 318–II, 379; II, 106–III, 39; II, 439–III, 370.

43) *Kitāb* I, 262; *'Uṣūl* I, 340. なお、アルムバッラドは同様の文脈で *al-fi'l al-matrūk 'izhāru-hu* (表面化しない動詞) と述べているが *'aḍmara* の用語は用いていない。 *Muqtaḍab* IV, 202.

44) *Kitāb* I, 118; *Muqtaḍab* III, 213; *'Uṣūl* II, 251.

45) *Kitāb*–*'Uṣūl*: I, 106–I, 144; I, 316–I, 295; I, 108–II, 248; I, 220–I, 151; I, 380–II, 149; I, 407–II, 232; I, 429–I, 238; I, 244–I, 247; I, 247–251; I, 244–I, 258; I, 329–I, 287; I, 316–I, 295; I, 262–I, 340; I, 367–I, 426; I, 187–II, 32; I, 333–II, 117; I, 363–II, 147; I, 407–II, 232; I, 108–II, 248; I, 124–II, 254; I, 333–II,

イブン・アッサッラージュの用語 *ḥaḍf* と *'iḍmār* の使い分けの検証から、次のようなことがわかった。*al-'Uṣūl* には、同じ概念や文脈であるにもかかわらず、二つの用語が混在し、一貫性のない使い方がなされている箇所がみられる。しかし、そのような箇所は限定的であり、上記のようにスィーバワイヒやアルムバッラドの使い分けが踏襲されている箇所が多数を占めている。イブン・アッサッラージュが二つの用語を無秩序に使っていると断定する根拠を見出すのは困難である。

3.3 ḥaḍafa 及び 'aḍmara の目的語

これまで見たように、*'iḍmār* は削除され伏せられている状態で、文法的機能を有している際に用いられることが多い。そのため、音韻レベルでの要素の削除の文脈で用いられることは少ない。「'an の削除」という場合、*ḥaḍf* ではなく *'iḍmār* のみが用いられる (Carter 1991: 123) との指摘も、*'iḍmār* が単なる「削除」の意味だけで使われるものではないことに関係している。しかしながら、イブン・アッサッラージュの *ḥaḍf* と *'iḍmār* の実際の使い方を見ると、必ずしもこれが正しいとは限らない。確かに、*'aḍmara* が *'an* を目的語にとる例は多いが⁴⁶⁾、*ḥaḍafa* が *'an* を目的語にとる例が2か所存在する。1つ目の例は、*ḡi'tu-ka li-taqūm-a* (あなたが起き上がるために私はやってきた) の *li-taqūm-a* が *li-'an taqūm-a* から *'an* が省略されたことの説明の中で、*wa-'in šī'ta ḥaḍafta 'an wa-'aḍmarta-hā* (望むなら *'an* を削除し表面上はそれを隠すがい)⁴⁷⁾のように、動詞 *ḥaḍafa* と *'aḍmara* を同時に用いている。この文脈では、*ḥaḍafa* と *'aḍmara* は同義語ではなく、また、補足的に似た意味の語に言い換えているわけでもない。単純に「削除する」ことと、「文法的機能を保持したまま表面的に見えない状態にする」という異なる意味の動詞を使い分けしていると捉えるべきであろう。*ḥaḍafa* が *'an* を目的語にとる2つ目の例は、タラファの詩 *'alā 'ayyuhā az-zāḡirī 'aḥḍur-a al-waḡā* (私が戦争に加わったとか言って私を誹る者よ)⁴⁸⁾ の *'aḥḍur-a* の読み方について、*'an 'aḥḍur-a* から *'an* が削除されたという説についてのスィーバワイヒの言葉を引用する形で *ḥaḍf 'an* (*'an* の削除) の表現を用いている⁴⁹⁾。*al-Kitāb* では該当箇所を見いだせず、イブン・アッサッラージュが *ḥaḍf* を用いた背景については不明である。

イブン・アッサッラージュによる *ḥaḍafa* と *'aḍmara* の使い分けを、より詳細に検討するために、何が「省略・削除」されるのかを整理することが不可欠であると考ええる。以下では、*al-'Uṣūl* の全3巻を通して、動詞 *ḥaḍafa* (*ḥaḍf*, *maḥḍūf* を含む) と

289.

46) *'Uṣūl* I, 426, II, 12, 147, 150, 151, 153, 154, 155, 176, 185, III, 472.

47) *'Uṣūl* II, 150.

48) 日本語訳は池田 2004: 14 による。この詩は *wa-'an 'aḥḍa al-laḡḍāt-i hal 'anta muḥliḍī* (私が享楽にわが身をやつしたと) と続く。スィーバワイヒはこの詩について「削除」に相当する語は用いていないが、アルムバッラドは *'iḍmār 'an* の表現を使用する。 *Muqtaḍab* II, 85.

49) *'Uṣūl* II, 162.

'aḍmara ('iḍmār, muḍmar を含む)⁵⁰⁾が、どのような maf'ūl (目的語; 被動作主)⁵¹⁾を取るのかという観点からまとめてみたい。なお、ここでの「目的語; 被動作主」とは、アラブ文法学で maf'ūl と呼ばれるものを指し、以下のような構文における名詞を含む⁵²⁾。

(a) イダーファの第1語の動名詞に後続する名詞属格が、動詞の意味上の目的語になる場合: ḡāza 'iḍmār-u al-maṣḍar-i, 'Uṣūl I, 163 (マスダルは削除は許される)。この例では、maṣḍar は動詞 'aḍmara の被動作主 (maf'ūl) とみなされる。

(b) 受動文の主語: ḥuḍifa ḥarf-u al-ḡarr-i, 'Uṣūl I, 171 (前置詞が削除された)。この例では、ḥarf が受動文の主語であり、アラブ文法学では maf'ūl と呼ばれる。

al-'Uṣūlにおいて、ḥaḍafa / ḥaḍf / maḥḍūfは458カ所で118種の目的語をとり、'aḍmara / 'iḍmār / muḍmar は163カ所で82種の目的語をとる。また、ḥaḍafa は al-'Uṣūl の全巻にわたって用いられるのに対し、'aḍmara は、2巻目から3巻目にかけてほとんど用いられない。これは、2巻目367頁以降、3巻目末尾までは音韻論、形態論が中心となることが大きな原因であると考えられる。このことは、目的語が'alif や tā'などの文字名⁵³⁾となる場合に、ḥaḍafa が使用されている例が極めて多いことでわかる。特に、'alif, tā', ṭā', ḡīm, dāl, rā', zāy, sīn, 'ayn, qāf, mīm, nūn, yā', hamza の文字名を目的語にとる場合、すべて ḥaḍafa が用いられ、'aḍmara が用いられる例を見出すことはできない⁵⁴⁾。

上記以外の文字のうち、bā', fā', lām, hā', wāw については ḥaḍafa と 'aḍmara のどちらも目的語にとる例が存在する。しかし、'aḍmara が使われるのは「文字」「音」の削除ではなく、「辞詞」の削除を意味する場合に限られる。

(i) 目的語 bā'

ḥaḍafa が bā'を目的語にとる例が2例⁵⁵⁾、'aḍmara が bā'を目的語にとる例が1例みら

50) muḍmar が「人称代名詞」の意味で用いられる例は含まない。

51) 便宜的に「目的語」としたが、maf'ūl を一律で「目的語 (object)」と訳すことの問題点については、Versteegh 1977: 59, Levin 1991: 920, 924, Peled 1999: 58, Kasher 2012: 13ff. を参照。

52) しばしば、「objective genitive」と呼ばれる。Carter 1981: 345, Kasher 2012: 4-7. なお、'aḡibtu min darb-i zayd-in 'amr-un (アムルがザイドを殴ったことに私は驚いた) の名詞属格 zayd-in は、伝統文法では maf'ūl と呼ばれる。Muqtaḍab I, 15, 'Uṣūl I, 137.

53) ḥarf は「文字」「音」「音節」「辞詞」などの意味を合わせ持つ。

54) 'alif (I, 146, 341, 357, 360, 362, 372, 431, II, 367, 379, 381, 389, 391, 418, III, 40, 47, 48, 52, 57, 67, 71, 75, 184, 277, 343, 343, 459), 'alif wa-tā' (II, 447), 'alif wa-lām (I, 331), 'alif wa-nūn (III, 358), 'alif wa-wāw (III, 46, 294-295), 'alif wa-yā' (III, 46), tā' (III, 43, 45, 432, 433), ṭā' (I, 365), ḡīm (I, 373), dāl (III, 12, 42, 43, 48), rā' (I, 360, III, 43, 45, 388), zāy (III, 132), sīn (III, 46), 'ayn (III, 278, 324), qāf (II, 389), lām wa-nūn (III, 433), mīm (III, 12, 42, 51, 459), nūn (I, 126, II, 144, 201, 262, 371, 424, III, 43, 44, 46, 48, 51, 178, 184, 240, 451, 455), nūn wa-sīn (III, 12), wāw wa-nūn (I, 360), yā' (I, 341, 342, 356, 364, 372, 373, II, 91, 94, 166, 201, 338, 365, 379: 383, 390, 424, 430, III, 48, 57, 72, 73, 74, 80, 131, 250, 277, 280, 281, 283, 284, 291, 312, 320, 343, 364, 366, 370, 385, 388, 391, 394, 398, 408, 456, 460), yā' wa-wāw (II, 202, 379, 390, 391, III, 460, 461), hamza (II, 367, 400, 406, III, 48, 51, 114, 226, 298, 333, 337, 338, 340, 350, 382, 387, 388, 390, 392)

55) 'Uṣūl II, 14; III, 44.

れる⁵⁶⁾。文法書中での *bā'* には、バーの文字、音 /b/ を指す場合に加え、前置詞 *bi-* を指す場合がある。*ḥaḍafa* は音としての /b/ と前置詞 *bi-* のどちらも目的語にとることができる。これに対し、*ʾaḍmara* は音としての /b/ を目的語にとることはしない。

次の例は、*ḥaḍafa* が音 /b/ を目的語にとる⁵⁷⁾。*qiršabb* の複数形が *qarāšib* となり、*b* が一つ削除されたことを指摘する際に、*ka-mā ḥaḍafta al-bā'-a fī qarāšib* (*qarāšib* において /b/ の音を削除したのと同様に) と説明している。

次の例は、*ḥaḍafa* が目的語にとる *bā'* は前置詞 *bi-* を意味する。*li-'anna qawl-a-ka: ḥaššantu yağūzu fī-hi ḥaḍf-u al-bā'-i wa-lā yağūzu fī marartu bi-zayd-in ḥaḍf-u-hā*. (なぜなら、*ḥaššantu* という場合、*bā'* [つまり、前置詞 *bi-*] を省略できるが、*marartu bi-zayd-in* においてはそれを省略できないからである)⁵⁸⁾

次は、*ʾaḍmara* が前置詞 *bi-* を目的語にとる例であり、省略された前置詞が、名詞属格を支配する機能を維持していることを含意する。*badā lī 'annī lastu mudrika mā maḍā wa-lā sābiq-in šay'-an 'idā kāna ḡā'iy-an* というズハイルの詩について、*mudrik* を修飾する *sābiq* が属格をとる理由について、前置詞 *bi-* が省略されていることを指摘して「*fa-'aḍmara al-bā'-a wa-'a'lama-hā, 'Uṣūl I, 252-3* (彼は前置詞 *bi-* を省略して意に留めた)」と説明している。

(ii) 目的語 *fā'*

ḥaḍafa が *fā'* を目的語にとるのは4例⁵⁹⁾、*ʾaḍmara* が *fā'* を目的語にとるのは3例⁶⁰⁾であった。

ḥaḍafa が *fā'* を目的語にとる例のうち1例は、*fā'* が「第1語根」の意味で用いられている⁶¹⁾。*wa-min aš-šādd-i: qawl-u-hum: taqaytu yataqā, wa-yatasi'u, ḥaḍafū al-fā'-a, 'Uṣūl III, 432* (逸脱したものとして、このような言い方がある: *taqaytu, yataqā, yatsi'u* のように、*fā'* [第1語根] を削除する)。これ以外の3例は接続詞 *fa-* を指す。たとえば、*'in ta'ti-nī fa-la-ka dirham-un* (私のところに来るならば、お前には銀貨が与えられる) の文に関連し、接続詞 *fa-* の省略の可能性について、次のように述べている。*wa-qad 'aḡāzū li-š-šā'ir-i 'idā uḍturra 'an yaḥḍifa al-fā'-a, 'Uṣūl II, 159* (必要に迫られれば、詩人が *fā'* [接続詞 *fa-*] を削除することは許される)

一方の *ʾaḍmara* が *fā'* を目的語にとる3例については、条件文 *'in ta'ti-nī fa-'ātī-ka* (もしあなたが私のところに来たら、私はあなたのところに行く) の帰結節における

56) *'Uṣūl I, 253*.

57) *'Uṣūl III, 44*.

58) *'Uṣūl II, 14*. *ḥaššantu bi-ṣadr-in* の前置詞 *bi-* の削除については *Kitāb I, 37; Muqtaḍab IV, 153* を参照。

59) *'Uṣūl II, 159, 193, III, 432, 461*.

60) *'Uṣūl II, 161; 198; III, 462*.

61) 3つの語根を示す F'L の最初の文字を指す。この例では、*taqā* という動詞は本来は *waqā* であり、第1語根の *wāw* が削除されたことを示している。スィーパワイヒによる同様の例の説明では、*al-maḥḍūfat-u allatī hiya makān-a al-fā'-i* (*fā'* の位置にあって削除されたもの) のように明示される。*Kitāb II, 480*.

fa- の省略 ('iḍmār al-fā') に関するものである。この箇所においては、前述のように、'iḍmār al-fā' と ḥaḍf al-fā' の表現が混在している⁶²⁾。

(iii) 目的語 lām

ḥaḍafa が lām を目的語にとるのは18例⁶³⁾、'aḍmara が lām を目的語にとるのは1例⁶⁴⁾であった。lām については、「文字・子音」のラームの意味に加え、辞詞としての li- や la- の例もみられる。

ḥaḍafa の目的語 lām のうち、8例は辞詞を意味する⁶⁵⁾。例えば、fa'altu ḍālika li-ḥiḍār-i aš-šarr-i⁶⁶⁾ (私は害悪を警戒してそれを行った) の例において、li-ḥiḍār-i の前置詞 li- を省略し、ḥiḍār-a とすることが可能であることを示す際に ḥaḍf al-lām (ラームの省略) の表現が用いられる。また、本来は li-'anna (なぜなら) であると想定される 'inna についても、ḥaḍf al-lām (ラームの省略) と呼ばれている⁶⁷⁾。これら以外にも、lā 'ab-an la-ka (あなたに父はいない) が詩において lā 'abā-ka となる場合⁶⁸⁾、wa-l-lāh-i (神に誓って) が lāh-i となる場合⁶⁹⁾、詩において li-yabki の「命令の li-」が省略され yabki となる場合⁷⁰⁾などがある。

また、「ラームの文字・子音」の意味で用いられている例として、safarḡal (マルメロ) の複数形 safāriḡ のように lām の文字が脱落する例⁷¹⁾、ḥanšālīl (駿足の駱駝) の縮小形が ḥunayšīl になりラームの文字が一つ脱落する例⁷²⁾がある。

さらに、語を形成する語根のうち lām を「第3語根」の意味で用いる場合がある。たとえば、lawin (ねじれた；胃に不調をかかえた) の第3語根が wāw ではなく yā' であり、この種の名詞の第3語根が消失することを ḥuḍifat al-lāmāt-u (ラームが消失した) と表現している⁷³⁾。また、名詞 fam (口) が、fū-ka / fā-ka / fī-ka (あなたの口) のように格変化することを受け、第2語根 ('ayn アインの文字) の位置を導入し、yahḍifūna al-lām-a (彼らはラームを削除した) との表現を用いている⁷⁴⁾。この例以外にも、ラームを第3語根の意味で用いている例は4か所ある⁷⁵⁾。

なお、'aḍmara の目的語は1例のみであり、上述のとおり「lām al-'amr (命令の li-)」の削除⁷⁶⁾の意味で用いられている。

62) 'Uṣūl II, 161, 193; III, 462.

63) 'Uṣūl I, 212, 267, 271, 390, 433, II, 157, 202, 207, 389, III, 12, 44, 51, 79, 273, 277, 333, 433, 434.

64) 'Uṣūl II, 174.

65) 'Uṣūl I, 212, 267, 271, 390, 433, II, 157, 202, 207, 389.

66) 'Uṣūl I, 212.

67) 'Uṣūl I, 267, 271.

68) 'Uṣūl I, 389–390. Cf. Kitāb I, 301.

69) 'Uṣūl I, 433. Cf. Kitāb II, 147.

70) 'Uṣūl II, 157. Cf. Kitāb I, 363. 同じ詩の例文 ('Uṣūl II, 174) に 'iḍmār も使用されている。

71) 'Uṣūl III, 12.

72) 'Uṣūl III, 51.

73) 'Uṣūl III, 79.

74) 'Uṣūl III, 273.

75) 'Uṣūl III, 277, 333, 433, 434.

76) 'Uṣūl II, 174. Cf. Muqtaḍab II, 131.

(iv) 目的語 *hā'*

ḥaḍafa が *hā'* を目的語にとるのは28例⁷⁷⁾、*ʿaḍmara* が *hā'* を目的語にとるのは10例⁷⁸⁾ あった。*hā'* に関しては、「文字・音」と「人称代名詞・接尾形 -hu (3人称男性単数)」 「ター・マルブータ (*tā' marbūṭa*)」の3通りの意味が混在して用いられている。

ḥaḍafa の目的語になる場合、「人称代名詞・接尾形 -hu (3人称男性単数)」の意味で用いられることが17例と多い⁷⁹⁾。たとえば、*ʿinna-hu zayd-un munṭaliq-un* (ザイドは出発する) のような文における *ʿinna-hu* に関して、人称代名詞・接尾形 -hu を文字名の *hā'* で呼び、*ʿinna zayd-un munṭaliq-un* のように省略が許されることを指摘する際に、*ḥaḍafta al-hā'-a* の表現を用いている⁸⁰⁾。また、*allaḍī ḍaraba-hu zayd-un ʿamr-un* (ザイドが殴ったのはアムルだ)⁸¹⁾ や、*allaḍī ḍahabtu fī-hi al-yawm-u* (私が出かけたのは今日だ)⁸²⁾ のような関係節において、先行詞を受ける人称代名詞 -hu の省略にも *ḥaḍf al-hā'* の表現が用いられている。これら以外にも、関係節中に現れる -hu に関する議論の中で *ḥaḍf al-hā'* が多用されている⁸³⁾。

ḥaḍafa の目的語になる場合のうち、「*hā'* の文字・音」の意味を持つものもみられる⁸⁴⁾。指示代名詞・女性単数 *hāḍihi* が *hāḍi* となる場合に *ḥaḍafū al-hā'* (彼らはハーを削除した) と表現している⁸⁵⁾。詩において、*šattā tarā'iq-u-hu* の -hu の脱落の有無をめぐる議論⁸⁶⁾、名詞 *ḍū* (持ち主) について、*fam* (口) を引き合いに出し、ハーの脱落に言及する箇所⁸⁷⁾ などがある。

ḥaḍafa の目的語になる場合のうち、*hā'* が「ター・マルブータ」の意味で用いられているものは7か所ある⁸⁸⁾。たとえば、*yā salma* (サルマよ) や *yā ṭalḥa* (タルハよ) の語末の文字・音の脱落を *ḥaḍf al-hā'* と表現する⁸⁹⁾。名詞 *muslima* (ムスリマ) の複数形 *muslimāt* について、女性語尾複数 -āt を付加する際にター・マルブータの文字を削除する (*ḥaḍafta al-hā'*) と述べている箇所⁹⁰⁾、*ḡawāriba* (靴下)、*mawāziḡa* (長靴) などの名詞複数の語形 *mafā'il* に付加されたター・マルブータの削除を *ḥaḍf al-hā'*

77) *ʿUṣūl* I, 232, 239, 254, 299, 360, 362, 363, II, 98, 127, 270, 271, 281, 283, 286, 293, 313, 315, 317, 323, 337, 391, 408, III, 68, 71, 79, 100, 132.

78) *ʿUṣūl* I, 237, 258, 299, 300, II, 44, 45, 210, 337, 339, 350.

79) *ʿUṣūl* I, 232, 239, 254, 299, 360, II, 270, 271, 281, 283, 286, 293, 313, 315, 317, 323, 337.

80) *ʿUṣūl* I, 232. イブン・アッサッラージュはこの種の代名詞について、ここでは *ḍamīr aš-ša'n* の用語は用いず、*ʿimād* 及び *maḡhūl* と呼んでいる。

81) *ʿUṣūl* II, 281.

82) *ʿUṣūl* II, 293.

83) *ʿUṣūl* II, 270, 271, 283, 286, 313, 315, 317, 323, 337.

84) *ʿUṣūl* I, II, 98, 127, 391 III, 79.

85) *ʿUṣūl* II, 127.

86) *ʿUṣūl* II, 391. Cf. *Kitāb* II, 328.

87) *ʿUṣūl* III, 78–79. イブン・アッサッラージュは語源を明示していないが、スィーバワイヒは *fam* の語源を *fawh* であるとしている。*Kitāb* II, 79.

88) *ʿUṣūl* I, 47, 362, 408, III, 68, 71, 100, 132.

89) *ʿUṣūl* I, 362. Cf. *Kitāb* I, 276.

90) *ʿUṣūl* I, 47. Cf. *Kitāb* I, 4; *Muqtaḍab* I, 143–144; IV, 39.

と呼ぶ箇所⁹¹⁾、女性名詞 *salma* (サルマ) から関連形容詞をつくる際の *hā' at-ta'nīt* の削除⁹²⁾、動詞 *šaḡiya* (不幸である) の動名詞 *šaḡāwa* と *šaḡā'* との関連を *hā'* の削除から解説する箇所⁹³⁾、動詞 *'azzā* (慰める) の動名詞 *ta'ziya* のター・マルブータの削除が許されないことを指摘する箇所⁹⁴⁾の計5か所ある。

'aḍmara の目的語になる場合は、すべての例において「人称代名詞・接尾形 (3人称男性単数) -hu」の意味である⁹⁵⁾。たとえば、クルアーン86章4節 *'in kull-u nafs-in la-mā 'alay-hā ḥāfiḡ-un* の *'in* について、*'inna-hu* の *-hu* を省略したものとの解釈する際に *'iḍmār al-hā'* と表現している⁹⁶⁾。

(v) 目的語 *wāw*

ḥaḍafa が *wāw* を目的語にとるのが17例⁹⁷⁾、*'aḍmara* が *wāw* を目的語にとるのが1例あった⁹⁸⁾。*wāw* についても、「文字・子音」のほかに、接続詞としての *wa-* を意味する場合がある。

ḥaḍafa が用いられる場合に、「文字・子音」が目的語になるものが13例ある⁹⁹⁾。*yā manṣu* は、*yā manṣūru* (マンスールよ) の末尾の音を省略した表現であるが、元からあったラーを省略し (*taḥḍifu ar-rā'-a wa-hiya 'aṣl-un*)、付加されたワーウを省略した (*taḥḍifu al-wāw-a wa-hiya zā'idat-un*) と述べている¹⁰⁰⁾。この場合のワーウは、半母音 /w/ を意味するものではなく、長母音 /ū/ を形成するために付加されるワーウの文字を指している。同様の例として、*'aswad* (黒い) の縮小形 *'usaywid* に対して、*'usayyid* の読み方が存在することに際してもワーウの削除と呼んでいる¹⁰¹⁾。その他、第1語根弱動詞 *wa'ada* (約束する) の未完了形・直説法が *ya'idu* となる点¹⁰²⁾、第2語根弱動詞の受動分詞 *mabī'* (売られた) や *mahīb* (恐れられた) が語形 *maf'ūl* から逸脱する点¹⁰³⁾などがある。

ḥaḍafa が用いられる場合に、「接続詞 *wa-*」が目的語になるものが4例ある¹⁰⁴⁾。たとえば、2つの名詞が1つの名詞として振る舞う例として、数詞 *ḥamsat-a 'aṣar-a* (15) をあげ、その語源を *ḥamsat-un wa-'aṣarat-un* であると説明する際に、*ḥaḍafta al-wāw-a*

91) *'Uṣūl* II, 408. 他に *'aṣā'īṭa*, *mahāliba*, *manāḍira*, *sayābiḡa*, *barābira* が例示されている。

92) *'Uṣūl* III, 68.

93) *'Uṣūl* III, 100. Cf. *Kitāb* II, 237.

94) *'Uṣūl* III, 132.

95) *'Uṣūl* I, 237, 258, 299, 300, II, 44, 45, 210, 337, 339, 350.

96) *'Uṣūl* I, 237; II, 210. Cf. *Kitāb* I, 244; *Muqtaḍab* I, 50. イブン・アッサッラージュは、この場合の *'in* を弟子のアルファーリスィー (*'Abū 'Alī al-Fārist*) が *'in al-muḥaffafa* (軽量化された *'in*) と呼ぶとしている。*'Uṣūl* I, 236.

97) *'Uṣūl* I, 212, 360, 433, II, 140, 349, III, 48, 51, 108, 277, 283, 307, 320, 334, 335, 337, 343, 439.

98) *'Uṣūl* II, 349.

99) *'Uṣūl* I, 360, III, 48, 51, 108, 277, 283, 307, 320, 334, 335, 337, 343, 439.

100) *'Uṣūl* I, 360. Cf. *Kitāb* I, 294.

101) *'Uṣūl* III, 48–49. Cf. *Kitāb* II, 118.

102) *'Uṣūl* III, 108, 307, 334.

103) *'Uṣūl* III, 283.

104) *'Uṣūl* I, 212, 433, II, 140, 349. (誓いの *wāw* の削除を含む *'Uṣūl* II, 433)

(あなたはワーウを削除した) と述べている¹⁰⁵⁾。

'aḍmara の目的語になるのは接続詞の wa- を意味する1例のみである¹⁰⁶⁾。min al-maḍrūbīna wa-'aḥad-u-hum muḥsin-un zayd-un (ムフスィンを含む殴られた者たちの中にザイドがいる) の wa-'aḥad-u-hum について、接続詞 wa- の省略の可否の議論において 'iḍmār wāw (ワーウの省略) の表現が現れる。ただし、同一箇所で ḥaḍf al-wāw の表現も意味の区別をせずに用いられていることは注目に値する。

(vi) 目的語 ḥarf

ḥaḍafa が ḥarf を目的語にとるのが11例¹⁰⁷⁾、'aḍmara が ḥarf を目的語にとるのが3例ある¹⁰⁸⁾。用語 ḥarf についても、「文字」「音」の意味と「辞詞」の意味とがある。

ḥaḍafa が用いられる場合、目的語である ḥarf はすべて「文字・音」の意味である。たとえば、'uṭmān (ウスマーン) が 'uṭm に、marwān (マルワーン) が marw になるように語末の ḥarf-āni (2文字)¹⁰⁹⁾が省略される例で ḥaḍafa が使われている¹¹⁰⁾。

'aḍmara が用いられる場合、目的語である ḥarf は「辞詞」の意味となり、具体的な語を指している¹¹¹⁾。

なお、ḥarf al-ḡarr が省略される例をみると、ḥaḍafa が用いられる例が11例あり、そのうち2例は「誓いの wa-」を意味する¹¹²⁾。残りの9例の ḥarf al-ḡarr は、'ilā, fī, 'an などの前置詞である¹¹³⁾。'aḍmara が用いられるのは2例あり¹¹⁴⁾、ともに ḥarf al-ḡarr は「誓いの wa-」を意味する。

これら以外にも、音韻論に深く関連する目的語については、ḥaḍafa が用いられる傾向が極めて強いといえる。「タンウィーン(tanwīn)の削除」「母音の付かない子音(sākin)の削除」「母音(ḥaraka)の削除」の場合、'aḍmara の目的語になる例は見出すことはできず、すべて ḥaḍafa が用いられている¹¹⁵⁾。

上記のことから、al-'Uṣūl においては、「文字」「音」の削除には、必ず ḥaḍafa が用いられるのである。このことは、'aḍmara が統語論の文脈で用いられる傾向が強いのに対し、ḥaḍafa は比較的広く音韻論、形態論、統語論の文脈で用いられるという違いを反映している。

105) 'Uṣūl II, 140. Cf. Kitāb II, 47.

106) 'Uṣūl II, 349.

107) 'Uṣūl I, 359, 365, II, 352, 361, 364, 366, III, 36, 72, 157, 224, 343.

108) 'Uṣūl I, 161, II, 147, 151.

109) ここでは、語末の -ān の音につき、文字による表記法に焦点を当て'alif (アリフ)と nūn (ヌーン)の2文字が削除されたと表現されている。

110) 'Uṣūl I, 359.

111) 辞詞'anの削除 ('Uṣūl I, 161; II, 151)、辞詞'an, lan, kay, 'iḍanの削除 ('Uṣūl II, 147)

112) 'Uṣūl I, 431, 432.

113) 'Uṣūl I, 171, 177, 179, 180, 182, 212, II, 54, 293.

114) 'Uṣūl I, 433; II, 247.

115) tanwīn ('Uṣūl I, 126, 132, 355, 389, II, 25, 67, 202, 382, III, 439, 455) sākin ('Uṣūl III, 48, 184, 257, 283, 335) ḥaraka ('Uṣūl II, 166, III, 248, 250, 405)

4 おわりに

本稿では、イブン・アッサッラージュの *al-'Uṣūl fī an-Naḥw* にみられる「省略・削除」を意味する用語の中から、*ḥaḍf* と *'idmār* に絞り、それぞれがどのように使い分けられるのかを二つの側面から検証した。

一つ目は、スィーバワイヒの使い分けが、イブン・アッサッラージュにどのように受け継がれたのかという点である。イブン・アッサッラージュが *ḥaḍafa*、*ḥaḍf*、*maḥḍūf* のいずれかを用いる文法現象に関し、スィーバワイヒやアルムバッラドが同じ用語を使う18カ所について検証した。また、同様の作業を *'aḍmara*、*'idmār*、*muḍmar* が使用される23カ所で行った。その結果、*ḥaḍf* と *'idmār* の使い分けに一貫性を欠いた箇所は極めて限定的であり、イブン・アッサッラージュが2つの用語を無秩序に使っていると断定する根拠としては不十分であることがわかった。概して、スィーバワイヒやアルムバッラドが用いた用語を、イブン・アッサッラージュが忠実に継承していると言ってよからう。

二つ目に、*al-'Uṣūl* において *ḥaḍf* と *'idmār* がそれぞれどのような目的語 (*maf'ūl*) をとるのかを調べた。その結果、*ḥaḍf* は、音韻論、形態論、統語論を問わず、広く用いられていることがわかった。これとは対照的に、*'idmār* は音韻論で用いられることはほとんどなく、特定の目的語や文脈を選ぶ傾向が強いことがわかった。また、多くの場合で、単なる省略や削除ではなく、表面に現れないまま、文法的機能を保ち続けていることを含意することも確認された。

なお、本稿では *ḥaḍf* と *'idmār* に絞って考察したが、これら以外にも省略・削除の文法記述において重要な役割を果たしている *zāla*、*'azāla*、*saqaṭa*、*'asqaṭa* などの動詞の使い分けについての考察が課題として残されている。

[参考文献]

[アラビア語原典]

- 'Astarābādī, *ŠK* = Muḥammad b. al-Ḥasan Raḍī ad-Dīn al-'Astarābādī, *Šarḥ Kāfiyat Ibn al-Ḥāḡib*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2 vol., 1969.
- Ibn as-Sarrāḡ, *'Uṣūl* = Muḥammad b. as-Sarī b. Sahl 'Abū Bakr Ibn as-Sarrāḡ al-Baḡdādī, *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*. Ed. by 'Abd al-Ḥusayn al-Fatī. Bayrūt: Mu'assasat ar-Risāla, 3 vol., 1985.
- Ibn Ġinnī, *Ḥaṣā'ish* = 'Uṭmān b. Ġinnī 'Abū al-Faṭḥ al-Mawṣilī, *al-Ḥaṣā'ish*. Ed. by Muḥammad 'Alī an-Naḡḡār. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-Miṣriyya, 3 vol., 1952–1956.
- Ibn Hišām, *Muḡnī* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh b. Yūsuf. *Muḡnī al-Labīb 'an Kutub al-'A'ārīb*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. Bayrūt: al-Maktaba al-'Aṣriyya, 1987.
- Ibn Ya'īs, *ŠM* = Muwaffaq ad-Dīn. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*. 10 vols. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub, n.d.
- Mubarrad, *Muqtaḍab* = Muḥammad b. Yazīd b. 'Abd al-'Akbar 'Abū al-'Abbās aṭ-Ṭīmālī al-'Azadī al-Mubarrad, *al-Muqtaḍab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Ḥāliq 'Uḍayma. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub, 4 vol., n.d.
- Sībawayhi, *Kitāb* = 'Amr b. 'Uṭmān b. Qanbar 'Abū Bišr Sībawayhi, *Kitāb Sībawayhi*. (*Le livre de Sībawaihi. Traité de grammaire arabe par Sībōuya, dit Sībawaihi*) Ed. by Hartwig Derenbourg. Paris: Imprimerie nationale, 2 vol., 1881–1889, reprint Hildesheim & New York: Georg Olms Verlag, 2 vol., 1970.

- Suyūṭī, *Hamʿ* = ʿAbd ar-Raḥmān b. ʿAbī Bakr b. Muḥammad b. Sābiq ad-Dīn Ġalāl ad-Dīn al-Ḥuḍayrī aṣ-Ṣāfiʿī as-Suyūṭī, *Hamʿ al-Hawāmiʿ fī Ṣarḥ Ġamʿ al-Ġawāmiʿ*. Ed. by ʿAḥmad Ṣams ad-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 4 vol., 1988.
- Zamaḥṣarī, *Mufaṣṣal* = Ġār Allāh ʿAbū al-Qāsim Maḥmūd b. ʿUmar b. Muḥammad b. ʿAḥmad al-Ḥawārizmī az-Zamaḥṣarī, *al-Mufaṣṣal fī ʿIlm al-ʿArabiyya*. Bayrūt: Dār al-Ġil, n.d.

[二次文献]

- Ayoub, Georgine. 1990. “De ce qui ne se dit pas dans le livre de Sībawayhi: la notion de Tamṭīl.” In *Studies in the History of Arabic Grammar II: Proceedings of the 2nd Symposium on the History of Arabic Grammar, Nijmegen, 27 April-, May 1987*, edited by K. Versteegh and M.G. Carter, 1–15. Amsterdam: John Benjamins.
- Ayoub, Georgine. 2019. “Pronouns in Sībawayhi’s *Kitāb* and Related Concepts: *ḍamīr*, *ʾiḍmār*, *muḍmar*.” *The Foundations of Arabic Linguistics IV. The Evolution of Theory*, ed. by Manuela E.B. Giolfo & Kees Versteegh, 30–60. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 97.
- Baalbaki, Ramzi. 2008. *The Legacy of the Kitāb: Sībawayhi’s Analytical Methods within the Context of the Arabic Grammatical Theory*. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 51.
- Carter, Michael G. 1981. *Arab Linguistics. An Introductory Classical Text with Translation and Notes*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, coll. “Studies in the History of the Language Sciences” 24.
- Carter, Michael G. 1991. “Elision”. In Dévényi, K. & Iványi, T. (Ed.), *Proceedings of the Colloquium on Arabic Grammar*, pp. 121–133. Budapest: Eötvös Lorand University Chair for Arabic Studies.
- Carter, Michael G. 2007. “Elision”. *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, II*, ed. by Kees Versteegh et al., pp. 16–18. Leiden & Boston: Brill.
- Carter, Michael G. & Versteegh, Kees. 2007. “*ʾiḍmār*”. *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, II*, ed. by Kees Versteegh et al., pp. 300–302. Leiden & Boston: Brill.
- Dayyeh, Hanadi. 2012. “The Relation between Frequency of Usage and Deletion in Sībawayhi’s *Kitāb*”. *The Foundations of Arabic Linguistics. Sībawayhi and Early Arabic Grammatical Theory*, ed. by Amal E. Marogy, pp. 75–98. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 65.
- Dayyeh, Hanadi. 2015. “*ʾittisāʿ* in Sībawayhi’s *Kitāb*: A Semantic *ʿilla* for Disorders in Meaning and Form”. *The Foundations of Arabic Linguistics II. Kitāb Sībawayhi: Interpretation and Transmission*, ed. by Amal E. Marogy & Kees Versteegh, pp. 66–80. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 83.
- Fleisch, Henri. 1960. “*ʾiḍmār*”. *The Encyclopedia of Islam*. 2nd ed. pp. 1248–1250. Leiden: E. J. Brill.
- Gully, Adrian. 1995. *Grammar and Semantics in Medieval Arabic: A study of Ibn Hisham’s ‘Mughni l-Labib’*. Richmond: Curzon.
- Hinds, John. 1982. *Ellipsis in Japanese*. Edmonton: Linguistic Research, Inc.
- Kasher, Almog. 2012. “The Term *Mafʿūl* in Sībawayhi’s *Kitāb*”. *The Foundations of Arabic Linguistics. Sībawayhi and Early Arabic Grammatical Theory*, ed. by Amal E. Marogy, pp. 3–26. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 65.
- Kinberg, Naphtali. 1996. *A Lexicon of al-Farra’s Terminology in his Qurʾan Commentary with Full Definitions, English Summaries and Extensive Citations*. Leiden, E.J. Brill.
- Levin, Aryeh. 1991. “What is Meant by *al-mafʿūl al-muṭlaq*?” *Semitic Studies: In Honor of Wolf Leslau on the Occasion of his Eighty-Fifth Birthday, November 4th, 1991*. Volume II, ed. by Alan S. Kaye, pp. 917–926. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Levin, Aryeh. 1997. “The Theory of *al-taqdīr* and Its Terminology”, *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 21, pp. 142–166.
- Levin, Aryeh. 2019. “The Phenomenon of *ittisāʿ al-kalām* in Old Arabic”. *The Foundations of Arabic Linguistics IV. The Evolution of Theory*, ed. by Manuela E.B. Giolfo & Kees Versteegh, pp. 212–224. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Lin-

- guistics” 97.
- Marogy, Amal E. 2010. *Kitāb Sībawayhi: Syntax and Pragmatics*. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 56.
- Okazaki, Hideki. 2022. “Ibn al-Sarrāġ’s Classification of Pseudo-Objects and the Grammatical Concept of *faḍla*”. *The Foundations of Arab Linguistics V. Kitāb Sībawayhi, The Critical Theory*, ed. by Manuel Sartori & Francesco Binaghi, pp. 179–197. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 107.
- Owens, Jonathan. 1988. *The Foundations of Grammar. An Introduction to Medieval Arabic Grammatical Theory*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Peled, Yishai. 1999. “Aspects of the Use of Grammatical Terminology in Medieval Arabic Grammatical Tradition”. In: *Arabic Grammar and Linguistics*, ed. by Y. Suleiman, pp. 50–85. Richmond: Curzon Press.
- Sakaedani, Haruko. 2019. “What is Definiteness in Arabic? Focusing on Proper Nouns for Genera and ‘*asmā’ mubhama* ‘Ambiguous Nouns’”. *The Foundations of Arab Linguistics IV. The Evolution of Theory*, ed. by Manuela E.B. Giolfo & Kees Versteegh, pp. 233–252. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 97.
- Troupeau, Gérard. 1976. *Lexique-index du Kitāb de Sībawayhi*. Paris: Klincksieck.
- Versteegh, Kees. 1977. *Greek Elements in Arabic Linguistic Thinking*. Leiden: Brill, “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 7.
- Versteegh, Kees. 1990. “Freedom of the speaker? The term *ittisā’* and related notions in Arabic grammar”, Kees Versteegh & Michael G. Carter eds., *Studies in the History of Arabic Grammar II: Proceedings of the 2nd Symposium on the History of Arabic Grammar*, Nijmegen, 27 April –1 May 1987, pp. 281–293. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
- Versteegh, Kees. 1993. *Arabic Grammar and Qur’ānic Exegesis in Early Islam*. Leiden: E.J. Brill.
- Versteegh, Kees. 2009. “*Taqdīr*”. *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics IV*, ed. by Mushira Eid, Alaa Elgibali, Kees Versteegh, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski, pp. 446–449. Leiden: E.J. Brill.
- Villano, Raoul. 2016. “Phonological Deletion in the Qur’ān: the Alternation of *iṣṭā’a* and *istaṭā’a* in *Sūrat al-Kahf*”. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 43, pp. 61–100.
- 池田修 2004. 「アルムアッラカート試訳 (II): タラファ」『関西アラブ・イスラム研究』4号, pp. 1–16.